「さすがに」に関する一考察

－「前提」との関わりを中心に－

呉 珠熙

キーワード：モダリティ副詞、前提、合致、矛盾、感情述語

0. はじめに

蓮沼（1987）は、「日本語の副詞の中には、外国語に翻訳しようとしても、対応する表現がみつけにくいばかりでなく、日本語の類義表現による言いかえによっても、そのニュアンスを正確に表しえない複雑な用法を持つ一群がある（p.203）」と述べ、「どうせ、せっかく、さすがに」などの副詞を挙げている。これらの副詞は、それぞれの副詞と文末のモダリティ形式との共起の仕方が他の副詞と違って、一様でなく、統語的・意味的な共通性が少ない。そのため、呼応関係を重視した日本語研究における副詞研究（いわゆる推量の副詞を中心とした研究）や、英語副詞との対照を中心とした先行研究（中右（1980）、澤田（1978）など、いわゆる評価の副詞を中心とした研究）などで提示される副詞の枠の中で位置づけられることができず、体系的な考察が十分に行われていない。しかし、現代日本語におけるモダリティの副詞[*1]に見られる特性を適切に反映した分析を行うためには、これらの副詞についても考察を試みるべきであろう。

しかしながら、「どうせ、せっかく、さすがに」などの副詞を、先行研究では共通して、「話し手が発話以前に持っている前提（括弧内の内容）と現状との関係に基づく話し手の心的態度を表わす副詞」と指摘している[*2]。

(1) 練習しても、練習しなくても、<u>どうせ</u>ジョンは勝つだろう。**（ジョンは強いという定評）**

(2) <u>せっかく</u>桜の花が咲いたのに、一晩で散ってしまった。**（桜の花が咲くのを楽しみにしていた）**

(3) <u>さすがに</u>横綱だけあって、強い。**（横綱は強いものである）**

そこで、本稿では、これらの副詞は共通して「前提[*3]」にもとづく話し手の何らかの心

的態度を表すと考え、その検証の一つとして、「さすがに[*4]」を取り上げ、「さすがに」に関係する「前提」にはどのようなものがあるかについて考察を試みる[*5]。

1.「さすがに」に関する先行研究

1.1.蓮沼（1987）

蓮沼（1987）では、「さすがに」の用法として〔順接用法〕と〔逆接用法〕を認めている。各用法における「さすがに」の意味をまとめてみると次のようである。

まず、〔順接用法〕とは、「**人物、事物の属性や本質的なあり方**に対して、一般の人々、あるいは話し手の個人がもつ**前提的知識**と、具体的な場面で話し手が観察、経験した**現実的事態のあり方**とが、**合致する**事を認める話し手の態度を表す（p.214）」と述べ、次のような例を挙げている。

(4) さすがカキの本場だけあって、うまい。

(5) さすがはプロだ。実にすばらしいプレーだ。

また、〔逆接用法〕とは、「話し手の**前提的知識や予想、期待と現状との間**に何らかの**対立、対比、矛盾、ズレ**があることを観察、経験した際に、それには実はそれなりの**別の正当な理由、裏打ちがある**からもっともなのだと、現状を認める話し手の態度を表す（p.215）」ものであると述べ、次のような例を挙げている。

(6) おいしそうなお菓子だが、もう満腹でさすがに手が出ない。

1.2.渡辺（1997）

渡辺（1997）は、「さすが」を共時態と通時態の両面から考察している。現代日本語の「さすが」の最も基本的用法については、森田（1977）の「さすが（に）」の二分類を援用し、次のように三つに類型化している。

まず、類型（一）としては、「**Aはさすがにaだ**[*6]」とモデル化し得るような用法が挙げられている。これは、森田（1977）の「さすが（に）」の二分類のうち、「（一）主体側の当然の帰結として、“やはり”と現状を認める場合」に該当するものであると述べている。そして、類型（一）の例としては次のようなものが挙げられている[*7]。

(7) 彼（A）は物識り博士と言われるだけであって、さすがに何でもよく知っている（a）。

次に、類型（二）としては「Aも B[*8]には さすがに ～a（b）だ」といった用法が挙げられている。類型（二）は、森田（1977）の「(二) 場面・成り行きの当然の帰結として現状をやむを得ず認める場合」に該当するものと述べ、次のような例が挙げられている。

(8) うまそうなアイスクリーム（A）だったが、こう寒くては（B）さすがに手が出ない（～a（b））。

最後に、従来の研究で、類型（二）「AもBにはさすがに～a（b）だ」の変形として扱われてきた、「さすがのAもBには～a（b）だ」のような形を類型（三）として独立させている。

(9) さすがのチャンピオン（A）も年齢には（B）勝てなかった（～a（b））。

2.「さすがに」における二つの前提について

前節の先行研究をまとめてみると、「さすがに」とは、その文を発する以前に話し手が持っている文の主体に対する事前の知識や特別な状況[*9]の発生からの予想を踏まえ、その予想とある事態（文の叙述内容）とが合致していることを表す副詞であるといえる。このような予想を導く事前の知識や特別な状況などを「前提」とすると、「さすがに」に関わる前提としては、次のように「属性的前提」と「事象的前提」という2種類の「前提」を想定することができる[*10]。

2.1. 属性的前提

蓮沼（1987）の〔順接用法〕（例（10））、森田（1977）の用法（一）（例（11））は、主体（A）の持っている特性・力量などによる予想の当然の帰結として、言表事態（a（以下、二重下線で表示する））を認めるものである。渡辺（1997）の「(一) Aはさすがにaだ」の類型として公式化できるものである。

ここでは、例（10）（11）における主体（A）が持っている特性・力量などを「属性的前提（以下、下線で表示する）」と呼ぶことにする。

(10) さすがカキの木場だけあって、うまい。（＝（4））

(11) 彼は物識り博士と言われるだけであって、さすがに何でもよく知っている。(＝(7))

上記の例は、共通して、主体（A）の「属性的前提」による予想と言表事態（a）とが合致していることを表すものであるといえるだろう。本稿では、このような用法を「さすがに」の【用法Ⅰ】と呼ぶことにする。

2.2. 事象的前提

蓮沼（1987）の〔逆接用法〕（例（12））、森田（1977）の用法（二）（例（13））は、言表事態（～a）は、主体（A）の持っている特性・力量（「属性的前提」）などによる予想の当然の帰結（a）として実現するものではないが、特別な状況（B）の発生による当然の帰結であると認められるもの（b）である。渡辺（1997）の類型「(二) AもBにはさすがに～a（b）だ」と「(三) さすがのAもBには～a（b）だ」として公式化できるものである。例（12）（13）における特別な状況（B）を「事象的前提（以下、点線で表示する）」と呼ぶことにする。

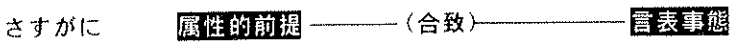
(12) おいしそうなお菓子だが、もう満腹でさすがに手が出ない。(＝(6))

(13) さすがの（いつも勝つはずの）チャンピオンも年齢には勝てなかった。(＝(9))

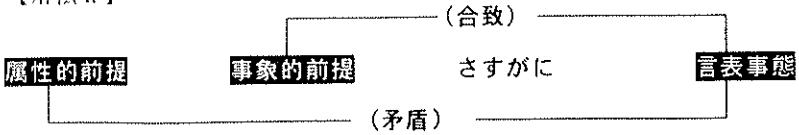
上記の例は、共通して、言表事態（～a（b））が主体（A）の「属性的前提」による予想とは矛盾するが、「事象的前提」（B）による予想とは合致することを表すものであるといえる。この用法を「さすがに」の【用法Ⅱ】と呼ぶことにする。

〔各用法における前提と言表事態との関係〕

【用法Ⅰ】



【用法Ⅱ】



3. 先行研究との相違点

前節の考察は、先行研究を参考としたものであるが、次のような相違点がある。

蓮沼（1987）は、〔順接用法〕と〔逆接用法〕・"の基本文型を整理し、次のように表示している（pp.214-215）。

〔順接用法の文型〕：P（話題の人物の通常の特性）、Q（現状）

i．サスガニ P　［テ／デ／ト／ダケアッテ／ダケニ etc］　Q

ii．サスガ［ニ／ハ］N ダ ―― （Q）

〔逆接用法の文型〕

i．P［ケレドモ／ガ／テモ／デモ］　サスガニ　Q

ii．サスガニ　Q　ケレドモ／ガ　P

iii．サスガ（ニ）　連体句＋Nモ　］　Q
　　連体句＋Nモ　サスガ（ニ）

iv．サスガノNモ　Q

蓮沼（1987）では、本稿の「属性的前提」にあたる「話題の人物の通常の特性（P）」と「現状（Q）」との「合致・矛盾」の意味関係を「順接・逆接」という構文関係に対応させ、「さすがに」の用法を〔順接用法〕と〔逆接用法〕に分類している。

したがって、順接の構文構造である、次のような例を〔順接用法〕の具体例として挙げている。

（14）五月に帰国して、八月には近所の子供をこわがって押し入れに入ったきりになってしまったケンをみて、さすがに愕然としてしまった。

しかし、例（14）の点線部分（主節と順接関係にある従属節）は、前述した「事象的前提」に該当するので、本稿では、【用法Ⅱ】に分類されるものである。渡辺（1997）の類型で公式化してみると、「（Aも）Bにはさすがに～a（b）である」のように表示できる。つまり、例（14）は言表事態と矛盾関係にある「属性的前提」をもっている主体（A）が現れていなく、言表事態と合致関係にある「事象的前提」が具現化されているため、順接の構文構造になっているのである。

「さすがに」の【用法Ⅰ】は、「属性的前提」と言表事態との合致関係だけを表すものであるため、「属性的前提」が従属節として表れる複文の場合には順接の構文構造になる。ところが、【用法Ⅱ】は、主体（A）の「属性的前提」と言表事態（～a（b））とは矛

盾するが、「事象的前提」（B）とは合致するという二つの「前提」と言表事態との関係を表しているものである。したがって、【用法Ⅱ】の場合は「属性的前提」が具現化されているか、「事象的前提」が具現化されているかによって、構文構造は順接関係にもなれるし、逆接関係にもなれるのである。次の例（15）は、「事象的前提（点線部分）」が具現化している実例であり、例（16）は、「属性的前提（下線部分）」と「事象的前提（点線部分）」の両方とも、具現化している実例である。

（15）滞在中、私はこの通路を通りイルカと目が合うたび、胸がきゅんと締め付けられた。それは何度もラグーンへ飛び込みたい衝動にかられたほど。当然そういう行為を禁止する看板は出ており、私も仕事中だったので、さすがに思いとどまったが、オフで時間があったらどうしていたかわからない。いや、絶対危なかったと思う。（地球、990427）

（16）ホテルのスタッフによると、施設内の水槽やラグーンに必ずイエロータンがいるのはこの逸話のせい。なんとなくロマンチックな言い伝えのようだが、実際に海の中で黄色いひょっとこの大群にとり囲まれる様子を想像したら、私はダイビングも熱帯魚も大好きだが、さすがにちょと気持ちがわるくなった。（地球、990511）

このように、「さすがに」における二つの「前提」と言表事態との関係は、複文の場合、構文的な接続関係（順接・逆接）に反映される場合が多い。ところが、「さすがに」の「前提」は話し手・聞き手の共通知識、または社会的な通念である場合が多く、暗黙の事実として省略されることが少なくないため、構文的な接続関係（順接・逆接）が「前提」と言表事態との関係にそのまま、対応するのではないといえよう[*12]。

以上から、「話題の人物の通常の特性」という「属性的前提」と言表事態との意味関係（合致・矛盾）だけを構文的な接続関係に対応させている蓮沼（1987）の二分類は不十分であり、「さすがに」の【用法Ⅱ】を説明するためには、「事象的前提」というもう一つの「前提」を想定する必要があるのである。

渡辺（1997）では、従来の研究で、「（二）ＡもＢにはさすがに～ａ（ｂ）だ。」の類型の変形として扱われてきた、「（三）さすがのＡもＢには～ａ（ｂ）だ。」の類型を次のような二つの理由から、独立させている。

（17）さすがのチャンピオンも年齢には勝てなかった。（＝（13））

①「（二）ＡもＢにはさすがに～ａ（ｂ）だ。」とは、～ａ（勝てなかった）という共通点があ

る。しかし、「さすがのA」という連体詞の形からも分かるように、評価はAに集中している点から、Bに「さすが」の評価が向いている（二）とは、異なる。

②「(一) Aはさすがにaだ。」とは、Aに集中している点は共通するが、～a（勝てなかった）という点が異なる。

本稿は「前提」と言表事態との関係のあり方を中心とした考察である。したがって、渡辺（1997）の（二）と（三）の類型は、「①両方とも、「属性的前提」と「事象的前提」の２つの前提が想定できる。②２つの前提と言表事態との意味関係が同じである。」という二点から【用法Ⅱ】としてまとめることにする。

（矛盾）

(18) おいしそうなお菓子だが、もう満腹でさすがに手が出ない。（＝（12））

（合致）

（矛盾）

(19) さすがの（いつも勝つはずの）チャンピオンも年齢には勝てなかった。（＝（13））

（合致）

4.【用法Ⅱ】の下位分類

4.1.重点の置き方による二分類

【用法Ⅱ】は、「属性的前提」と「事象的前提」という二つの「前提」が想定されるものである。したがって、【用法Ⅱ】は、二つの「前提」のどちらに重点が置かれるかによって、次のように下位分類することができるだろう。

【用法Ⅱ-1】「属性的前提」と「事象的前提」の両方に重点が置かれたもの（両方の「前提」が言表される場合）。

(20) おいしそうなお菓子だが、もう満腹でさすがに手が出ない。（＝（12））

【用法Ⅱ-2】「事象的前提」に重点が置かれたもの（主体（A）の属性が、その主体（A）の一般的に持つと考えられている属性であり、特に言表されていない場合）。

(21) いきなり気絶するから、さすがにびっくりしたよ。

上記の【用法Ⅱ-1】は、【用法Ⅱ】の典型的な例として先行研究（辞書）でよく取り上

げられるものである。しかし、【用法Ⅱ-2】は言表事態と「事象的前提」との（意味的な）合致関係に重点が置かれているため、矛盾関係にある「属性的前提」の存在が目立たない用法である。先行研究によっては、【用法Ⅰ】に分類される場合もある*[13]。

【用法Ⅱ-2】については、4.2 節で詳しく説明することにする。

4.2. 感情述語との共起

以下の例は、4.1 節で言及した【用法Ⅱ-2】の実例である。これらは「事象的前提」に重点が置かれ、言表事態とは矛盾する主体（A）の属性が、その主体（A）の一般的に持つと考えられている属性であり、特に言表されていない場合である*[14]。

(22)「おい！　やったぞ！」荒井が突然大声を上げて飛び出して来た。「な、何よ、大声出して！」気でも狂ったのか、と思った。「見ろ！　当たったんだ！　宝くじが当たった！この間、会社の奴から売りつけられたのが当たったんだ！」荒井は今にも踊り出さんばかりだ。さすがに智子の顔色が変わった。「ほ、本当？――い、いくらなの？」声が思わず震える。「見ろ！千円当たったんだ！たった二百円の券で千円も――」智子の顔色がもう一度変わった。（女社）

(23) 木下家・居間（夜）

受話器を握りしめる美都子。　憔悴している。　ようやく呼び出し音が途切れた。

美都子　「（すぐに言葉が出ない）.....」

耕平の声　「もしもし？」

美都子　「.....私です」

耕平の声　「ああ.....」

美都子　「何度もかけたのよ」

耕平の声　「付き合いでね。今帰って来たところだ。なんだ、夜遅くに.....」

美都子　「（泣きそうに）いろんなことがあって.....気が狂いそうなの.....」

耕平の声　「（さすがに心配そうに）何があったんだ」（魔夏）

(24) 会計事務所の税理士といった印象の、堅実でおとなしい風貌をしていた。その人物が元ボクサーで、しかもこのジムのオーナーだとは、とうてい信じられなかった。どう見ても興行というやくざな社会に似合いそうもなかった。いつもジムにいて、こまこまと動きまわっているので、何らかの関係者とは思っていたが、練習生のひとりが「会長」と呼び、その人物が「おう」と返事した時には、さすがに驚いた。この人が金子繁治なのか、とまじまじ彼の顔を見つめたものだった。（一瞬）

次の表は、収集した「さすがに」の用例を、前提と言表事態との関係によって【用法Ⅰ】と【用法Ⅱ】に分類したものである*[15]。【用法Ⅱ-2】の実例は、【用法Ⅱ】の全例（237 例）の中、33.3%（79 例）を占めている。

	話し言葉		書き言葉		合　計
	【用法Ⅰ】	【用法Ⅱ】	【用法Ⅰ】	【用法Ⅱ】	
さすがに	11	18	37	182	248
さすが	34	0	8	9	51
さすがの	0	5	0	23	28
さすがは	8	0	0	0	8
さすがだ	8	0	1	0	9
合計	61/**72.6%**	23/**27.3%**	46/**17.6%**	214/**82.3%**	344

【用法Ⅱ-2】の実例を検討してみると、共通して述語が主体の感情を表していることが分かる。【用法Ⅱ-2】の実例の述語を具体的にあげてみると次のようである。

驚く、緊張する、顔色が青くなる、慌てる、ムットする、ガックリ（ガッカリ）する、うろたえる、心配する、腹を立てる、息を切らせる、胸が騒ぐ、まいる、恥じる、‥‥。

上記の述語は、寺村（1982）の「感情の表現」の中、「一時的な気の動き、受身的感情の表現」と重なるものが多い。以下は、「一時的な気の動き、受身的感情の表現」に関する寺村（1982）の説明である。

（１）物音に おどろく／おびえる／ぎょっとする
（２）その結果に 失望する／がっかりする
（３）一点差に泣く
（前略）（１）～（３）のような種類の動詞は、**何らかの特定の外界の出来事のために、一時的に感情（気）が動き、それが何らかの感情を伴う**という点を特徴とする。そのような動詞による表現は、その感情の主体－動作の「仕手」に対して「感じ手」と呼ぶことにする－のほかに、そのような**気の動きの誘因をあらわす言葉を必須補語として要求する**（ｐ 140）。
（中略）
[一時的な気の動き（の文型）][*16]
述語：**おどろく、おびえる**、おろおろする、**青くなる**、ぎょっとする、**びっくりする**、びくびくする、**うろたえる**、はっとする、とびあがる、ほっとする、安心する、安堵する、**怒る、かっとなる、腹を立てる、腹が立つ**、興奮する、**酔う**、浮かれる、沸く、うっとりする、**陶然となる**、失望する、**がっかりする、がっくりする**
補語：感情主（Ｘ）→Ｘが
誘因（Ｙ）→Ｙに　（ｐ 152）

「一時的な気の動き、受身的感情の表現」と「さすがに」が共起する場合、「一時的な

気の動き、受身的感情の表現」の必須補語として要求される「そのような気の動きの誘因をあらわす言葉」は、「事象的前提」として解釈され、「事象的前提」と言表事態との合致関係に重点が置かれることになる。そのため、「属性的前提」と言表事態との関係は相対的に目立たなくなり、あえて「属性的前提」を補って解釈するとかえって不自然になる場合もある。

しかし、この用法を「事象的前提」と言表事態との合致関係だけを表す【用法Ⅲ】として独立させないで、【用法Ⅱ】の下位タイプとして位置づけたのは、「属性的前提」を具体的に想定して解釈するまでの必要はなくても、完全に無視することもできないからである。【用法Ⅱ-2】でも「属性的前提」は、発話時の（一時的な気の動きをしている）主体に対し、「常時の主体の属性」を表すものとして存在していると考えられる。

5. まとめ

以上、前提に関わるモダリティ副詞の一つとして「さすがに」を取り上げ、「さすがに」に関係する前提について考察を行った。ここまで述べてきたことを要約すると次のようになる。

まず、本稿では「さすがに」の基本的な意味を、話し手の持っている発話以前の「**前提」と言表事態とが合致すること**であると考える。そして、言表事態と合致する「さすがに」の前提としては、「**属性的前提**」と「**事象的前提**」という二種類の前提が認められる。「さすがに」は、言表事態が「**属性的前提」と合致**するか、「**事象的前提」と合致**するかによって、【用法Ⅰ】と【用法Ⅱ】とに大別される。

そして、二つの「前提」と言表事態との関係を表す【用法Ⅱ】は、**どちらの「前提」に重点が置かれるか**によって、さらに【用法Ⅱ-1】と【用法Ⅱ-2】とに下位分類することができるのである。「属性的前提」と「事象的前提」の両方に重点が置かれた【用法Ⅱ-1】に対し、【用法Ⅱ-2】の「さすがに」の場合は、「感情述語との共起」という統語的条件によって、「事象的前提」と言表事態との合致関係により重点が置かれることになるのである。

【注】

1）現代日本語の文は、概略、「命題」と「モダリティ」といった質的に異なった二つの層から成り立っ

ている。従って、現代日本語の基本的な意味構造は、次のように、「モダリティ」が「命題」を包み込む、というあり方を取っているのである。

たぶん　彼が来る　だろう　ね

本稿では、上記のように、「助動詞」、「終助詞」などと一緒にモダリティ表現形式として使われる「たぶん」などの副詞を「モダリティ副詞」として呼ぶことにする。いわゆる「陳述副詞」「文副詞」より広い範疇のカテゴリである。

2) 蓮沼（1987）、西原（1987）、森本（1994）などを参照。

3) 本稿では、言及した副詞類に関わる「前提」を、「その副詞が適切に使われるため、発話以前に備えなければならない状況的知識」と定義する。

4) 「さすがに」に関連する形態としては、他にも「さすが」「さすがは」「さすがの」「さすがだ」がある。本稿では「さすがに」を代表形とする。

5) 「前提」と関係するモダリティ副詞としては、本文の中に挙げられている「どうせ、せっかく、やはり、さすが」以外にも、「なまじ（渡辺 1980）」「いっそ、せめて（板坂 1971）」などがある。

6) ・小文字ａｂは「具体的実現」、
・大文字Ａは「その具体的実現をもたらすだけの素質なり力量なりを備えたもの」（渡辺（1997）、p4）

7) 渡辺（1997）は、各類型の例も森田（1977）で提示された例を援用している。ただし、下線、括弧内は筆者が補充したものである。

8) ＢとはａをＡの素質なり力量なりを脇から阻む力として存在するもの（渡辺（1997）、p6）。

9) 並はずれた主体の性質を例外的に実現させないような状況。これは、渡辺（1997）の「さすが」の類型（二）「ＡもＢにはさすがに～ａ（b）だ」のＢに該当する。注８）参照。

10) 益岡（1987）は、叙述の基本タイプとして「属性叙述」と「事象叙述」という２つの類型を提示している。以下は、益岡（1987）の「属性叙述」と「事象叙述」に関する記述である（p21）。

＊属性叙述：現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取りあげ、それが有する何らかの属性を述べる。
＊事象叙述：現実世界の或る時空間に実現・存在する事象（出来事や静的事態）を叙述するものである。

「さすがに」に関わる２種類の前提、すなわち、主体の属性に対して事前の知識を表す前提と特別な状況を表す前提とは、各々の叙述内容が益岡（1987）の「属性叙述」と「事象叙述」にほぼ重なる。従って、本論では、前者を「属性的前提」、後者を「事象的前提」と呼ぶことにする。益岡（1987）の叙述の類型と本論で提示した２種類の前提との関連性についてはより詳しい考察が必要であるが、今後の課題にしたい。

11) この分類は、本発表での【用法Ⅰ】と【用法Ⅱ】にほぼ対応する。

12) 寺村（1978）では、「文を構成する要素の中には、外界に依存するいろいろな語法、いいかえると外界についての話し手・話し相手の知識に言及しなくてはその意味・用法が説明できないような語法」があると述べ、「さすがに」の場合は、「ある対象の社会的格付け、性格についての通念に依存する語法である（p.12）」としている。

13) ４節であげた蓮沼（1987）の例（14）は、【用法Ⅱ-2】に該当する例であろう。

（14）五月に帰国して、八月には近所の子供をこわがって押し入れに入ったきりになってしまったケ

ンをみて、さすがに愕然としてしまった。

14) これは、【用法Ⅰ】の場合、予想できる主体の「属性的前提」が他人と区別できるほど特殊な性質のものであるため、感嘆のニュアンスを伴うことが多い、という事実と対照的である。

15) 「書き言葉」は、新聞の社説、小説の中で用いられたものである。「話し言葉」は、シナリオ・新聞・小説の会話部分、及び対談の中で用いられたものである。資料については最終部の「資料一覧」を参考されたい。

16) 以下に挙げられている動詞のうち、ゴシック体になっているものは、今回収集した「さすがに」の実例の述語として実際にみられたものである。

【参考文献】

板坂 元（1971）『日本人の論理構造』講談社新書

河原崎幹夫（1975）「副詞導入の具体的研究１－『さすがに』－」『日本語学校論集』２号

工藤浩 （1982）「叙法副詞の意味と機能－その記述方法をもとめて－」「国立国語研究所」『研究報告集３』秀英出版

小矢野哲夫（1983）「副詞の呼応－誘導副詞と誘導形の一例－」 渡辺実編 『副用語の研究』明治書院

澤田治美（1978）「日英語副詞類の対照研究：speech act 理論の観点から」『言語研究』74 号

高見健一（1985）「日英語の文照応と副詞、副詞句」『言語研究』87

寺村秀夫（1978）「語法と社会通念」『日本語・日本文化』8 号 大阪外国語大学留学生別科刊行

（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

中右実（1980）「文副詞の比較」国広哲弥（編）『日英語比較講座 第２巻 文法』大修館書店

西原鈴子（1988）『話し手の前提－「やはり（やっぱり）」の場合－」『日本語学』vol.7.3

_____（1991）『副詞の意味機能』 国立国語研究所『日本語教師指導参考書 19 副詞の意味と用法』大蔵省出版局

西山佑司（1982）『語用論的前提をめぐって』「慶応義塾大学文化研究所紀要」

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』くろしお出版

蓮沼昭子（1987）「副詞の語法と社会通念－『せっかく』と『さすがに』を例として－」『言語学の視界』大学書林

飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用語辞典』東京堂出版

益岡隆司（1987）『命題の文法』くろしお出版

森田良行（1977）『基礎日本語』角川書店

森本順子（1994）『日本語研究叢書７ 話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版

渡辺実（1980）「見越しの評価「せっかく」をめぐって」『月刊言語』第９巻第２号

_____（1997）「難語「さすが」の共時態と通時態」『上智大学 国文学科紀要』 第 14 号

【例文出典】

（冬子）－「冬子の物語」（ラジオシナリオ、「土曜ドラマ館」）

（刑事）－「スチュワーデス刑事３」（シナリオドラマ）

（魔夏）－「魔夏少女」（ドラマシナリオ）

（地球、990427）－「地球の暮らし」、 朝日 1999 年 4 月 27 日

（地球、990511）－「地球の暮らし」、朝日 1999 年 5 月 11 日

以下は、新潮文庫 100 冊 ＣＤ－ＲＯＭ版

（塩狩）－『塩狩峠』 （三浦綾子、1960）

（孤高）－『孤高の人』（新田次郎、1960）

（楡家）－『楡家の人びと』 （北杜夫、1960）

（女社）－『女社長に乾杯！』（赤川次郎、1987）

（一瞬）－『一瞬の夏』（沢木耕太郎、1980）

【資料一覧】

〈新聞〉 朝日新聞 社説 85-86,00.2-4,6-8／天声人語 85-87, 00.2-4,6-8／レイディ通信（対談）99.10-00.7／アエラ（おすすめ記事）98.10-00.7／ひととき（読者投稿）99.2-00.5／自分にごほうび隊（趣味）99.2-00.3／地球の暮らし（エッセイ）98.10-00.03

毎日新聞 社説 '99.4-00.3

（シナリオ）「土曜ドラマ館」（ラジオ）：ＦＭ福岡土曜日 12:30-12:55 放送，'97.10-'00.4

ドラマシナリオ：1984 － 2000

〈小説〉新潮文庫 100 冊 ＣＤ－ＲＯＭ版

『アメリカひじき・火垂るの墓』（野坂昭如、1960）／『エディプスの恋人』（筒井康隆、1970）／『コンスタンティノーブルの陥落』（塩野七生、1980）／『さぶ』（山本周五郎、1960）／『一瞬の夏』（沢木耕太郎、1980）／『塩狩峠』（三浦綾子、1960）／『花埋み』（渡辺淳一、1960）／『華岡青洲の妻』（有吉佐和子、1960）／『雁の寺・越前竹人形』（水上勉、1960）／『錦繍』（宮本輝、1980）／『孤高の人』（新田次郎、1960）／『国盗り物語』（司馬遼太郎、1960）／『黒い雨』（井伏鱒二、1965/66）／『砂の女』（安部公房、1960）／『山本五十六』（阿川弘之、1960）／『女社長に乾杯！』（赤川次郎、1987）／『沈黙』（遠藤周作、1966）／『青春の蹉跌』（石川達三、1960）／『楡家の人びと』（北杜夫、1960）／『太郎物語』（曽野綾子、1970）／『新橋烏森口青春篇』（椎名誠、1980）／『人民は弱し官吏は強し』（星新一、1960）／『忍ぶ川』（三浦哲郎、1960）／『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（村上春樹、1985）／『戦艦武蔵』（吉村昭、1960）／『砂の上の植物群』（吉行淳之介、1960）／『若き数学者のアメリカ』（藤原正彦、1970）／『点と線』（松本清張、1950）